

# RSA暗号解読における ふるい法について

2008年6月13日

後 保範 (東京工芸大学)

# 目次

1. はじめに
2. 篩(ふるい)法
3. 3重基底多項式ふるい法(TBPS)の概要
4. 2次式TBPSの関係式
5. 3次式TBPSの関係式
6. TBPSのふるい検討事項
7. おわりに

# 1. はじめに

- (1) 現在の暗号 (RSA暗号)や認証システムは多数桁数(1024ビット,10進309桁)の因数分解の困難さを利用している。
- (2) 現在の多数桁数の因数分解の世界記録は、RSA-200(10進200桁)。2005年5月、ドイツのボン大学、GNFSを使用。
- (3) 現在、RSA-1024(1024ビット)の因数分解はスーパーコンで数百年必要と推定。

## 1.1 暗号化方式

### (1) 公開鍵暗号方式(非対称鍵)

公開鍵で暗号化、秘密鍵で復号化

認証やネットワーク通信に都合が良い

RSA暗号: 多数桁数因数分解の難しさを利用

### (2) 秘密鍵暗号方式(共通鍵、対称鍵)

暗号化と復号化で共通の秘密鍵を使用

代表暗号例: DES(IBM), RC4(Netscape )

## 1.2 RSA暗号

(1) 鍵の作成(公開鍵: $n, e$ 、秘密鍵: $d$ )

素数 $p, q, e$ (暗号鍵)を選び、 $n=p \times q$ を計算

秘密鍵:  $d \equiv 1/e \pmod{(p-1) \times (q-1)}$

(2) 暗号化(整数 $M$ を暗号 $C$ に変換)

$$C \equiv M^e \pmod{n}$$

(3) 復号化(暗号 $C$ を整数 $M$ に変換)

$$M \equiv C^d \pmod{n}$$

## 1.3 復号化の数学的理論

### (1) オイラーの定理

$p, q$ が素数なら下記が成立。ここで $n=p \times q$

$$M^{(p-1)(q-1)} \equiv 1 \pmod{n}$$

### (2) $C^d \pmod{n}$ が $M$ になる理由

$d \equiv 1/e \pmod{(p-1)(q-1)}$ より $ed = a(p-1)(q-1) + 1$

$$\begin{aligned} C^d &\equiv (M^e)^d \equiv M^{a(p-1)(q-1)+1} \equiv (M^{(p-1)(q-1)})^a \cdot M \\ &\equiv 1^a \cdot M \equiv M \pmod{n} \end{aligned}$$

## 1.4 因数分解の方法

### (1) 篩(ふるい、Sieve)系解法

計算量は合成数の桁数に依存

RSA暗号の解読に都合が良い

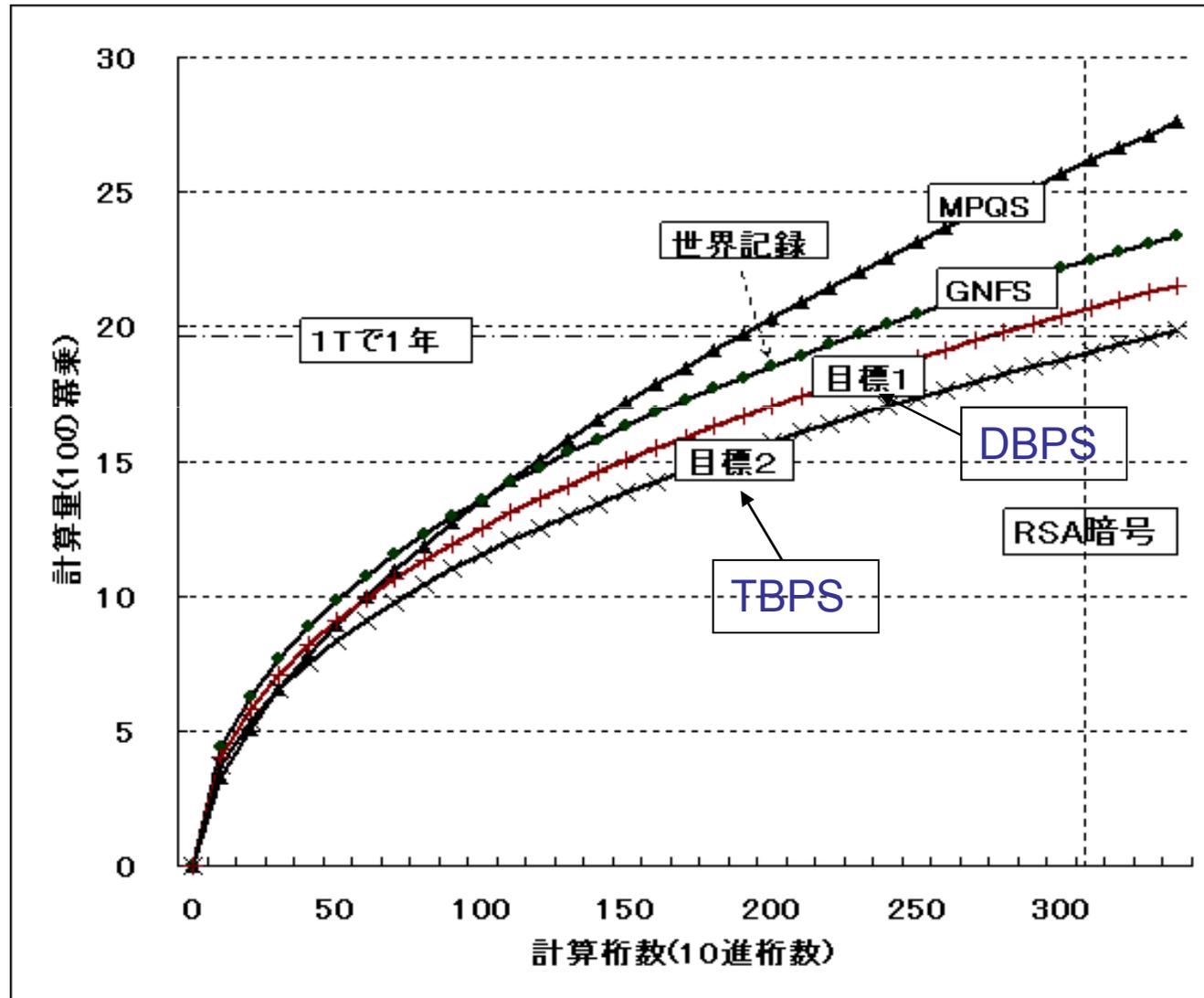
MPQS、GNFSが代表的解法

### (2) 楕円曲線法(Elliptic Curve Method,ECM)

計算量は小さい因数の桁数に依存

RSA暗号の解読には不向き

# 1.5 因数分解の計算量推定



## 2. 篩(ふるい)法

- (1)  $A^2 - B^2 = (A - B)(A + B) \equiv 0 \pmod{N}$  の関係を使用し、 $N$  を因数分解
- (2)  $A_1^{l_1} \cdot A_2^{l_2} \cdots A_k^{l_k} \equiv B_1^{m_1} \cdot B_2^{m_2} \cdots B_j^{m_j} \pmod{N}$   
なる関係を基底の数より多く集める
- (3) 0-1行列を計算し、両辺が平方になるもの  
(従属関係)のデータを探す
- (4) MPQS, GNFS等が代表的なふるい法

## 2.1 代表的なふるい法

- (1) **QS** (Quadratic Sieve、2次ふるい法)  
MPQS (Multiple Polynomial QS、  
複数次多項式2次ふるい法)が代表的解法
- (2) **GNFS** (General Number Field Sieve、  
一般数体ふるい法)。現在、100桁程度  
以上で最も高速な解法と言われている。
- (3) **TBPS** (Triple Base Polynomial Sieve、  
3重基底多項式ふるい法、提案解法)

## 2.2 QS(2次ふるい法)

(1) QS (Quadratic Sieve, 2次ふるい法)

Nを分解、Xは $N^{1/2}$ に最も近い整数

$$(X+k)^2 - N = A_k, \quad k=0,1,2, \dots$$

素数基底で分解できる $A_k$ を集める

(2) MPQS (Multiple Polynomial QS)

複数の2次多項式を使用

代表例： $d^2 - N \equiv 0 \pmod{c}$ なる $(c,d)$ の組で

$(c \cdot x + d)^2 - N = c \cdot f(x)$ と変換し $f(x)$ を分解

## 2.3 NFS(数体ふるい法)

(1) 分解の違いを利用 (SNFS, 特殊数体篩法)

$N$ を分解、 $f(M) \equiv 0 \pmod{N}$ なる多項式

$f(x)=0$ の根の一つを $\theta$ とする。

$a+bM$ を素数基底で分解、

$a+b\theta$ を生成元(素元と単元)で分解

(2)  $N=1333$ の例 ( $f(x)=x^3+2$ ,  $M=11$ ,  $\theta^3=-2$ )

$2+M=13$ ,  $2+\theta=\theta(1-\theta)(1+\theta)=\theta-\theta^3$

$\rightarrow -10 \cdot 11 \cdot 12 \equiv 13 \pmod{N}$

## 2.4 GNFS(一般数体ふるい法)

### (1) SNFS→GNFS

一般には素元が求まらない。

→ 素元の代わりに素イデアルを使用

問題点: 平方の形が明示的に現れない

→ イデアルの積が平方となるようにする

### (2) GNFSで新たに必要なこと

(a) 平方剰余の追加: 平方の確率を高める

(b) イデアルの平方根を求める

### 3. TBPSの概要

- TBPS (Triple-Base Polynomial Sieve、3重基底多項式ふるい法)はGNFSとDBPSを合体させたもので、ふるいは下記データを採用
  - (1) GNFSのふるいで得られたデータ
  - (2) DBPSのふるいで得られたデータ
  - (3) イデアル $a\theta+b$ の整数倍 $G(a\theta+b)$ がGNFSのふるいと同様に扱えるデータ→ 今回着目

## 3.1 2次式におけるDBPS

- DBPS: 2重基底多項式ふるい法
  - (1) 対象多項式(分解対象数はN)
 
$$f(x) = Ax^2+Bx+C, \quad f(M) \equiv 0 \pmod{N}$$
  - (2) DBPSの計算式
 
$$(A_1x+a)(A_2x+b) - f(x) = Sx+T = G(sx+t)$$

$$S=A_1b+A_2a - B, \quad T=ab - C, \quad A_1A_2=A$$

$$G=\text{sign}(G) \cdot \text{GCD}(|S|,|T|), \quad s=S/G, \quad t=T/G$$
  - (3) ふるいによる得られるデータ
    - (a)  $A_1M+a, A_2M+b$ 及び $sM+t$ が基底分解できるもの
    - (b)  $A_1x+a, A_2x+b, sx+t$ で一致するもの

## 3.2 3次式におけるDBPS

(1) 対象多項式(分解対象数はN)

$$f(x) = Ax^3+Bx^2+Cx+D, \quad f(M) \equiv 0 \pmod{N}$$

(2) DBPSの計算式

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) - f(x) = Sx+T = G(sx+t)$$

$$A_1A_2A_3=A, \quad A_1A_2c+A_1A_3b+A_2A_3a=B,$$

$$S=A_1bc+A_2ac+A_3ab-C, \quad T=abc - D$$

$$G=\text{sign}(G) \cdot \text{GCD}(|S|,|T|), \quad s=S/G, \quad t=T/G$$

(3) ふるいによる得られるデータ

(a)  $A_1M+a, A_2M+b, A_3M+c$  及び  $sM+t$  が基底分解

(b)  $A_1x+a, A_2x+b, A_3x+c, sx+t$  で一致するもの

## 4. 2次式TBPSの関係式(1/2)

- TBPS: 2重基底多項式ふるい法
  - (1) 対象2次多項式(分解対象数はN)  
 $f(x) = Ax^2+Bx+C, \quad f(M) \equiv 0 \pmod{N}$
  - (2) TBPS(DBPSと同じ)の計算式  
 $(A_1x+a)(A_2x+b) - f(x) = Sx+T = G(sx+t)$   
 $S=A_1b+A_2a - B, \quad T=ab - C, \quad A_1A_2=A$   
 $G=\text{sign}(G) \cdot \text{GCD}(|S|,|T|), \quad s=S/G, \quad t=T/G - (4.1)$
  - (3) イデアル $a\theta+b$ のノルム( $N(a,b)$ )  
 $N(a,b) = a^2 \cdot f(-b/a) = | Ab^2 - Bab + Ca^2 |$

## 4. 2次式TBPSの関係式(2/2)

- TBPSの関係式

- (1) ノルムの関係式

$$N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) = A \cdot N(S, T) \quad - (4.2)$$

- (2) ノルム関係式にGが現れるケース

(4.1)式で|G|が2以上なら下記が成立する。

$$N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) = A \cdot G^2 \cdot N(s, t) \quad - (4.3)$$

- (3) TBPSの計算式(前頁の(4.1)式の再掲)

$$(A_1x+a)(A_2x+b) - f(x) = Sx+T = G(sx+t)$$

$$S=A_1b+A_2a - B, \quad T=ab - C, \quad A_1A_2=A$$

$$G=\text{sign}(G) \cdot \text{GCD}(|S|, |T|), \quad s=S/G, \quad t=T/G \quad - (4.1)$$

## 4.1 ふるいでの利用(2次多項式)

$$(1) N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) = A \cdot N(S, T)$$

$$(A_1x+a)(A_2x+b) \equiv Sx+T \pmod{f(x)}$$

から、 $S\theta+T$ の素イデアル分解は、 $A_1\theta+a$ 及び  
 $A_2\theta+b$ の素イデアル分解で生成される。

$$(2) N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) = A \cdot G^2 \cdot N(s, t)$$

$$(A_1x+a)(A_2x+b) \equiv G(sx+t) \pmod{f(x)}$$

から、異なる  $G$  を使用すれば、 $s\theta+t$  と  $G(s\theta+t)$   
は共にGNFSのふるいデータとして利用可能

←  $G(s\theta+t)$  のノルムが  $(A_1\theta+a)(A_2\theta+b)$  で可能

## 5. 3次式TBPSの関係式(1/2)

(1) 対象2次多項式(分解対象数はN)

$$f(x) = Ax^3 + Bx^2 + Cx + D, \quad f(M) \equiv 0 \pmod{N}$$

(2) TBPS(DBPSと同じ)の計算式

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) - f(x) = Sx + T = G(sx+t)$$

$$A_1A_2A_3=A, \quad A_1A_2c+A_1A_3b+A_2A_3a=B,$$

$$S=A_1bc+A_2ac+A_3ab - C, \quad T=abc - D$$

$$G=\text{sign}(G) \cdot \text{GCD}(|S|, |T|), \quad s=S/G, \quad t=T/G - (4.4)$$

(3) イデアル $a\theta+b$ のノルム( $N(a,b)$ )

$$N(a,b) = a^3 \cdot f(-b/a) = | Ab^3 - Bab^2 + Ca^2b - Da^3 |$$

## 5. 3次式TBPSの関係式(2/2)

(1) ノルムの関係式

$$N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) \cdot N(A_3, c) = A \cdot N(S, T) \quad - (4.5)$$

(2) ノルム関係式にGが現れるケース

(4.1)式で|G|が2以上なら下記が成立する。

$$N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) \cdot N(A_3, c) = A \cdot G^3 \cdot N(s, t) \quad - (4.6)$$

(3) TBPSの計算式(前頁の(4.4)式の再掲)

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) - f(x) = Sx+T = G(sx+t)$$

$$A_1A_2A_3=A, \quad A_1A_2c+A_1A_3b+A_2A_3a=B,$$

$$S=A_1bc+A_2ac+A_3ab-C, \quad T=abc - D$$

$$G=\text{sign}(G) \cdot \text{GCD}(|S|, |T|), \quad s=S/G, \quad t=T/G \quad - (4.4)$$

## 5.1 ふるいでの利用(3次多項式)

$$(1) N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) \cdot N(A_3, c) = A \cdot N(S, T)$$

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) \equiv Sx+T \pmod{f(x)}$$

から、 $S\theta+T$ の素イデアル分解は、 $A_1\theta+a$ ,  $A_2\theta+b$  及び  $A_3\theta+c$ の素イデアル分解で生成される。

$$(2) N(A_1, a) \cdot N(A_2, b) \cdot N(A_3, c) = A \cdot G^3 \cdot N(s, t)$$

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) \equiv G(sx+t) \pmod{f(x)}$$

から、異なる  $G$  を使用すれば、 $s\theta+t$  と  $G(s\theta+t)$  は共にGNFSのふるいデータとして利用可能

←  $G(s\theta+t)$  のノルムが  $(A_1\theta+a) \dots (A_3\theta+c)$  で可能

## 6. TBPSのふるい検討事項

- TBPSのふるいを高速化するには、整数倍のイデアル $G(a\theta+b)$ がGNFSのふるいで採用さればよい。それに必要な条件は下記。

(1) 異なる $G$ で下記が成立する。

$$(A_1x+a)(A_2x+b) - f(x) = G(sx+t) \quad : 2次式$$

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) - f(x) = G(sx+t) : 3次式$$

(2) 上記の関係が無くても

$a\theta+b$ と $G(a\theta+b)$ が共に可能な条件

→ 現在調査中(異なる $G$ は条件)

## 6.1 $G(a\theta+b)$ が利用できる利点

- GNFSのふるいデータとして有効な条件
  - (1)  $(a\theta+b)$ だけふるいに利用(従来のGNFS)  
 $aM+b$ 、 $a\theta+b$ が共に因子基底で分解要
  - (2)  $G(a\theta+b)$ もふるいに利用(TBPS)  
 $aM+b$ 、 $a\theta+b$ の一方が因子基底で分解要

注)  $M$ は整数で $\theta$ は代数根で下記が成立

$$f(M) \equiv 0 \pmod{N}, \quad f(\theta) = 0$$

整数 $aM+b$ は素数基底で分解

イデアル $a\theta+b$ は素イデアル基底で分解

## 7. おわりに

- (1) 異なるGで下記なら $s\theta+t$ 及び $G(s\theta+t)$ をふるいデータとして採用可能なことが判明。

$$(A_1x+a)(A_2x+b) - f(x) = G(sx+t) \quad : 2次式$$

$$(A_1x+a)(A_2x+b)(A_3x+c) - f(x) = G(sx+t) : 3次式$$

- (2) 2,3次多項式のTBPSで $a\theta+b$ と $G(a\theta+b)$ が共にふるいデータとして採用できる条件を明確にする。
- (3) 高次(4~7次)多項式で(2)の条件を明確にする。
- (4) RSA-768(10進232桁)の因数分解に挑戦する。